

読書のいずみ izumi

No. **55**
本を媒介とした
人と人のつながりを求めて

本の探偵団

赤木かん子

VS

福島京子

神谷浩司

長野まゆみ

暉峻淑子

関 曠野

荻野アンナ

加藤哲郎

栗坪良樹

〈特集〉
本気で読む



サイン本プレゼント
赤木かん子さんの新刊
絵本のブックガイド
を抽選で10名の方にプ
レゼント！
(詳しくは22ページ)

CONTENTS

読書のいずみ 1993. 夏季号 No.55

▶あ頃の本たち

2 「本は足で探す」
●長野まゆみ(作家)

4 「読書は感性の受信機で」
●暉峻淑子(埼玉大学教授)

6 「さすらいとしての読書」
●関 曠野(文筆家)

▶座・対談

8 「本の探偵、登場」
●赤木かん子(作家)
福島京子(法政大学)
VS 神谷浩司(名古屋大学)

▶わが大学の先生と語る

24 「 mismatch で逆転ホームラン」
●荻野アンナ(慶應義塾大学)
VS 谷口純子 村山征史
園田尚志 石橋 優

▶テーマ解題

32 「占換世代2世は選挙を面白くできるか？」
●加藤哲郎(一橋大学教授)

34 「寺山修司が蘇った」
●栗坪良樹(青山学院女子短期大学学長)

▶雑誌のちからこぶ

36 「NAVI」
●鈴木正文

▶自著紹介

39 「奔放な読書」
●浜名優美(南山大学教授)

40 「法政平和大学十年のあゆみ」
●尾形 憲(法政大学教授)

41 「現代学校論」
●山崎雄介(京都大学助手)

42 「マルコムX自伝」
●浜本武雄(明治大学教授)

▶私の読書

46 ●中田 洋(近畿大学)
●岡本康之(大阪大学)
●東 剛己(北海道大学)

▶投稿書評

48 「金門クラブ」
●井竿富雄(九州大学)

49 「人の砂漠」
●小杉浩文(北海道大学)

50 「子供の本の現在」
●冠野 文(大阪大学)

51 「移動図書館ひまわり号」
●牛島 顯(大阪大学)

▶映画から原作へ

52 「チャーリー」
●松山正男(神奈川大学教授)

▶Air Mail

54 「義務として得られる権利」
●高橋信行(京都教育大学)

56 ▶リレーエッセイ
●近藤 太(北九州大学)

▶特集

57 「本気で本の仕事」
●上田高史 ●佐藤順一
●島本脩二 ●菊地信義
●横山和雄 ●横山雄一
●小山テル子 ●田口久美子
●横尾穰二 ●竹内紀吉
●中道恵子 ●岩崎れい

82 ▶事業案内 84 ▶いずみの窓
90 ▶掲載図書一覧 92 ▶編集後記

表紙イラスト/ふるうち あやこ



加藤哲郎

占拠世代2世は選挙を面白くできるか?

略歴 (かとう てつろう)

1947年、岩手県生まれ。一橋大学社会学部教授。東京大学法学部卒業。政治学、国家論、比較政治専攻。名古屋大学助手、一橋大学講師、助教授を経て89年から現職。この間、英国エセックス大学、米国スタンフォード大学・ハーバード大学各客員研究員。

〈主な著書〉「社会と国家」「戦後憲政の裏面」(岩波書店)、「コミンテルンの世界像」「国家論のルネサンス」(青木書店)、「ジャバメリカの時代に」「東欧革命と社会主義」「ソ連崩壊と社会主義」(花伝社)、「社会主義と組織原理」(憲社)、「社会主義の危機と民主主義の再生」(数訂史料出版社)他

私は昨年『社会と国家』(岩波書店)という本を出し、日本の企業社会・社会主義と民主主義の関係を探ってきた。そこでは日本社会の重要な特徴として、先進国では異常に長い労働時間や過労死の問題をとりあげた。そのヒントになった一つの仮説がある。比較政治の立場から、男女平等や有権者と議員とのつながりの強さをみると、年間実労働時間が短い北欧諸国のような国ほど、女性や社会的弱者の権利が保障され、政治参加が活発で、討論型デモクラシーが定着している。日本は先進国で最も労働時間が長く、女性議員が少なく、政権交替が40年もない。だから「日本は企業社会・長時間労働で自由時間・社会的時間が少ないので、市民は公共的コミュニケーションを基礎に民主政治に参加するヒマがない。労働時間短縮は日本の政治改革の必要条件である」という仮説をたててみた。

ところが、どうしてもうまく説明できない問題が残された。学生と政治との関係である。労働運動の衰退と住民運動・市民運動の隆盛、その市民運動の担い手が家庭の主婦や退職した老人などいわゆる全日制市民であることは、先の仮説で説明できる。しかし、日本人のライフサイクルのなかで最もヒマで自由時間があるはずの学生たちの中で、なぜ公共的討論が広がらず、政治参加が衰退し、政治的無関心が増大しているかがうまく説明できない。労働時間短縮は民主主義の必要条件であっても、

十分条件ではない由縁である。

社会階級・階層と政治の関係は、かつては「労働者・若者=反体制・革新」「農民・老人=体制・保守」の図式で説明される時代があった。日本でも1970年代初頭まではこの図式がある程度通用した。ところが70年代後半以降、こうした構図は成り立たなくなった。そればかりか、政党支持・政策選択以前の、政治的知識・関心と参加志向のレベルで、若者、特に大学生の「政治離れ」が顕著になった。テレビの普及や偏差値・学歴競争による受動化でもある程度は説明できるが、過労死・過労児だけでは説明できない。

権利の無自覚は民主主義の危機

若者の選挙への関心は、私の学生時代、1960年代後半のいわゆる大学紛争の時代でも、決して高くはなかった。だがそれは、政治的無関心や政治参加の弱さからではなく、むしろ若者の政治意識の高さ、選挙による間接的代表選出という手続きへの自覚的抵抗と批判、参加と直接民主主義を求める意識の裏返しと評価された。投票率の低さは政治意識の高さの反面でもあった。その時代は、選挙ならぬ占拠が流行った。世界でも日本でも、学生たちは政府や教授会の学生管理に反発し、既成の権威を否定し大学を占拠してバリケードを築いた。国政選挙や地方選挙への関心は弱く、選挙の一票よりもキャンパス占

ボリアーキー

R・ダール 著 高島通敏・前田脩 訳/三一書房/
1981年/2427円
デモクラシーを公的異議申し立てと政治的包括性の織りなす「民主化」の課程ととらえ、政治参加の意味を考える現代政治学の名著。まずは政治を原理的に考えること。

投票行動

三宅一郎 著/東京大学出版会/1989年/1900円
政治学の立場からの選挙についてのスタンダードな解説。現代政治学叢書の一冊で、選挙も学問的にみると奥行きが深いことを知るだろう。みんなで学習会をしてみたら。

扱や街頭デモの政治的効果が重んじられた。

だが、団塊2世たる今日の学生の政治や選挙への無関心は、親たちの占拠の時代とはちがって、金権政治への意識的抵抗や直接民主主義志向ではなさそうだ。無関心と諦観が圧倒的なようだ。世論調査では若者の政治的関心ばかりか政治的知識も衰退している。大学に入っても住民票を移していないから選挙権がない（実は実家にある）、選挙管理委員会からの葉書を紛失したから行かない（近所の投票所で葉書がなくても投票できる）、選挙の日もサークル活動やドライブやデートで忙しいから投票に行かない、といった学生が見られる。権利の無自覚であり、軽やかな放棄である。

私たちの学生時代の選挙への無関心・軽蔑は、それ自体がある種の政治と自覚され、選挙を超える政治が目指された。しかし、現実の政治体制は重く頑強で、私達の行動をも大きく枠づけていた。大学を終えて会社や官庁に入ると、企業ぐるみ選挙や組合ぐるみ選挙という強制政治参加＝動員があった。石油危機で日本経済が危うくなると、わか社と家族が大事という生活保守主義が広がった。そしてその2世たちが大学生となり「友人をもてない豊かな生活」「政治の話はグサイ」というコミュニケーションの閉塞のなかで、選挙権を権利として実感しえないでいる。民主主義の危機である。

なぜならば、20世紀の民主政治は、19世紀型の「教養と財産を持つ成人男性」に限られた政治参加が男女平等普通選挙権へと広がったことを基礎としている。そこに至るには、チャーチスト運動から労働運動・学生運動・女性解放運動・黒人公民権運動などの権利と参加を求める

社会運動があった。その獲得された権利が生かされぬまま眠りこむと、政治は職業政治屋の利益分配機構となる。占拠の時代に夢見られた「選挙を超える参加」も、劇画化され無意味になる。

21世紀の主人公へ

選挙は、一票の手ごたえがなければ、つまらないものである。いびつな選挙制度により、その効果も歪曲される。選良たる代議士が利益誘導に走り、私腹を肥しているのも事実である。にもかかわらず、選挙結果は私たちに重くのしかかる。自治会もデモもストライキも占拠も、意見広告や国際ボランティアに加わるのも、ある種の政治である。しかしそれらは、選挙で選ばれた議員たちの立法のような正統性は獲得できない。だからこそ、かつて大学占拠に熱中した世代からも、地方選挙・国政選挙を通じて政治を変えようとする人々が生まれている。アメリカ大統領クリントンは、いわば占拠から選挙へと転身した一つの世代の持続する政治参加の象徴である。国会を選挙により占拠すれば、政治は変わるのだから。

団塊2世の若者も、せめて選挙に加わり自分の権利を行使すべきではないか。冷戦崩壊で政党政治は混沌としている。生き生きしたデモクラシーのためには、自由で公共的な時間と濃密なコミュニケーション・討論の広場が必要だ。いまや世界の大勢である18歳選挙権を要求してもいい。投票したい政党がなければ自分たちで勝手に候補をかつぎたい。選挙を面白くするのも政治改革である。21世紀の主人公は、確実に君たちなのだから。

現代日本の選挙

小林良彰 著／東京大学出版会／1991年／2400円
選挙結果を通じての日本政治分析。支持政党無し層や社会階層毎の生活意識と投票行動の関連について詳細に述べられている。選挙制度改革のシュミレーションも入っている。

代議士の誕生—日本式選挙運動の研究

G・カーチス 著 山岡清二 訳／サイマル出版会／1971年／2039円
やや古いが、日本の選挙と永田町型政治の秘密を知る上での特典。著者がアメリカ人であるがゆえにここまで代議士の裏側に肉薄できたという逆説も日本的である。

市民自立の政治戦略

山口定・宝田善・進藤栄一・住沢博紀編／朝日新聞社／1992年／1539円
市民運動や参加を重視した政治改革の提言。選挙が政策選択にならないのが日本型民主主義の問題なら、大前研一やこの本を参考に、自分たちのオルタナティブを作ってみよう。

